

# アイヌ民族と朝鮮人をめぐる記憶と表象

## ―日高地方を中心に

石 純姫(苫小牧駒澤大学)

### はじめに

北海道平取町と穂別町(現在むかわ町穂別)はそれぞれ沙流川・鵠川流域に沿って広がる町であり、川の流域に沿って内陸部まで古くからアイヌの居住地が存在した。近代化のなかで強制移住させられたアイヌの人々が定住するようになった場所もあるが、アイヌの人々の集落は、朝鮮人の定住化にも密接な繋がりがあった。

植民地支配下での朝鮮人の北海道への移住が進行するなかで、アイヌコタンやその周辺での定住化も早くからみられる。それは、鉄道敷設、灌漑用水路工事、炭鉱での労働現場にアイヌコタンが近接していたことや、戦時期における随道工事や炭鉱、鉱山などへの強制的労働動員が行われた際に、そこから脱出した朝鮮人がアイヌ民族に助けられ、その集落に身を潜め、やがて定住化していったことによる。そして、その子孫はアイヌ民族の古くからのコタンであった地域のなかで少なくない比率で存在し、現在アイヌ民族の伝統文化を継承する伝承者となっている人々も存在する(石純姫「アイヌ集落への朝鮮人の定住化の形成過程について」2004年度財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構研究助成(中規模研究)報告書、2005年、石純姫「北海道近代における朝鮮人の定住化とアイヌ民族」『東アジア教育文化学会年報』第3号、2006年、1～13頁)。また、調査を進めるなかで前近代期からのアイヌ民族との繋がりがも明らかになってきた(石純姫「前近代期の朝鮮人の移動に関する一考察 ― 北海道における在日朝鮮人の形成過程とサハリンアイヌの関係を中心に」『苫小牧駒澤大学紀要』第18号、2008年、145～166頁など)。

近代化のなかで共に国民国家の物語から排除されてきたアイヌ民族と朝鮮人は、密接な繋が

りを保ちながら共存してきたが、その共存のあり方は非常に複雑で重層的であり、公的記録はもちろんのこと、民衆史や人々の記憶においても、忘却と記憶が葛藤を続けてきた。本稿では、平取町と穂別町における近代期の朝鮮人とアイヌ民族に関して、史実がどのように記憶され、公的な記録や記念碑などのモニュメントとしてどのように表象されているかについてのささやかな考察である。

### 1. 平取町墓地条例と遺骨発掘

#### 1-1) 平取町共同墓地の慰霊碑

1977年8月9日平取町は「平取町墓地条例」を交付し、町有墓地の設置および管理並びに使用料の徴収についての規定を定めた。これに伴い、町内の各地域にある墓地の区画整理が行われることになった。

1969年から、平取町ではアイヌの墓地の大規模な「整備」が始められている。平取町各地域のアイヌ墓地で、クワ(槐で出来た墓標)が引き抜きかれ、埋められていた遺骨が掘り出されていた。江戸末期からのアイヌ民族の遺骨発掘が学問の名のもとに行われてきたことの犯罪性は重大な問題であり、多くの研究がなされてきた。近年は「学問に内在する暴力」として捉えられている(植木哲也『学問の暴力―アイヌ墓地はなぜあばかれたか』春風社、2008年)。

しかし、この時平取で行われたのは、学問のためではなく、墓地整備のためにアイヌの人々の遺骨は掘り起こされていった。当時アイヌ民族で平取町議員だった宇南山斎氏は、無縁のアイヌの人々の遺骨を一ヶ所にまとめて埋葬し、慰霊碑を建立するために有志を募り、当時の平取町議員で道南バス平取営業所の所長であった佐藤旭氏などが出資したという。この「祖先代々

「萬霊無縁の碑」は1969年に木碑が建てられ、1982年に石碑になった。1977年の墓地整備条例が公布された時には、すでに平取町のアイヌ墓地からは遺骨が掘り起こされ、墓標が引き抜かれていたのである。

この「祖先代々萬霊無縁の碑」をはさんで右側には「オキクルミ神」の石碑と「馬頭観音」、また何も刻まれていない小さな石が埋められており、左側には「静御前之霊位」と「世界人類が平和でありますように」のポールが建てられている。

この様々な碑が立ち並ぶ場所は、「義経神社」につながる「義経公園」の一角にあり、「オキクルミ神」の石碑が1983年に建てられている。オキクルミ神とは、日高地方のカムイユカラではアイヌの創世神で、アイヌに狩猟漁猟や大船の作り方、神事などを教え、知恵を授けたとされる（田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』草風館、1996年）。

ところで、源義経は奥州平泉で死亡したのではなく、北海道に渡り平取に來たとする「伝説」があり、オキクルミが源義経だとするものである。この伝説の発祥ともなったのが平取の義経神社であり、町は観光拠点としても力を入れている。しかし、この平取の義経神社は江戸時代に近藤重蔵が開いたものであり、北海道に流布している「義経伝説」は「先住民族であるアイヌの人々を懐柔するために極めて意図的政治的に持ち込まれた概念」として捏造されたとし、義経神社は「異民族支配達成の象徴的記念碑(モニュメント)」であるとする説もある（佐藤弘弥「北海道の義経伝説」[http://www.st.rim.or.jp/~success/hokkaidoY\\_ye.html](http://www.st.rim.or.jp/~success/hokkaidoY_ye.html)ほか）。現在、義経伝説に関しては、詳細な検討が進められており、前述の説が妥当性をもつものとされている。

さらに、このオキクルミが義経だという認識に立って、義経の愛妾であった白拍子静御前の墓までが建立されている。和人によるアイヌ支配のためにつくられた「伝説」のもとに、平取の歴史の虚構が作り上げられてきた。

こうした墓地整備事業は、それまでの墓地の風景を一変させたであろうことは想像に難くない。先住者であるアイヌの人々の墓は槐の墓標であり、墓参という慣習もなく、家族や親族が亡くなると遺体を埋葬し、木の墓標を立て、他に誰かが亡くなるまで墓を訪れることはない。

墓標の木が自然に朽ちていくことで、魂が天国に行くのだと考えられていたのである。各地の郷土史でも、新しく整備された墓地の様子は見ることができが、整備される以前の墓地の様子が記録として残されているものはない。墓地整備事業は、アイヌ民族が先住者として存在した痕跡を消すためのひとつの格好の機会であったともいえる。アイヌの人々の墓標を抜き取り、遺骨を掘り出し、平らに均された墓地に、後から入植してきた和人たちの墓石が立ち並ぶ。一部の裕福なアイヌは、早くから和人と同様な墓石になっていたが、この墓地整備事業以降、多くのアイヌの人々の墓もそれまでの槐の墓標ではなく墓石になり、現在見られるような墓地の風景が出来上がっていったのである。

また、「世界人類が平和でありますように」と書かれたポールは、静岡県に本部がある「白光真行会」という宗教団体によって1999年に立てられたもので、ピースポールといわれる。この平取町のピースポールには日本語、アイヌ語、ギリシア語の他にハングルでの表記が目をはく。平取町では、アイヌの碑があるそばにこのハングルが記されたポールが立っていることがしばしばある。平取町でアイヌ民族と朝鮮人の慰霊を共に行ってきたアシリレラ氏（日本名：山道康子、「沙流川を守る会」代表、「山道アイヌ職業訓練校」・「アイヌモシリー万年祭」主宰）が慰霊を行った場所には、このピースポールが建てられている。アシリレラ氏と共に慰霊祭に参加した人々のなかに白光真行会の会員がいて、碑の建立を静岡本部に申請し建立したものである。

この平取本町の碑のなかで最も特異なものは、何も刻まれていない石の碑である。これは「祖先代々萬霊無縁の碑」と共に、アイヌ民族ではない無縁者の慰霊碑として宇南山氏ら有志が置いたものであるが、朝鮮の人々の遺骨が埋められているという話もある。平取町には、数多くの「無縁の碑」が建立されているが、朝鮮人という記載はいつさいない。この石の沈黙は語られない歴史の重さを逆説的に象徴しているとも言える。

尚、1974年には平取本町共同墓地の東側中央に「無縁故者墓」が平取町福祉協議会によって建立されており、この碑は墓参者の誰の目にも

留まる場所にある。「無縁」の遺骨についてさえ、何が町の共同墓地の中で「無縁」として慰霊されるのか、何が排除されるのかが注意深く選別されているのである。

### 1-2) 福満の共同墓地

平取町と門別本町に跨る川向という地域は、かつてウヨッペコタンというアイヌの集落があったところであり、後に平取町と門別町（現・日高町）に行政区画が分けられ、平取側が「川向」、門別側が「福満」となった。コタンのはずれには墓地があり、そこにアイヌの人々の遺骨が埋葬されていたが、ここも平取の他の地区と同様にアイヌの遺骨が掘り起こされた。掘り起こされた遺骨は富川の「富川高台墓地」の納骨堂に保管された。ここはかつてアイヌ墓地があった場所で、1990年に遺骨が発掘され、門別町（現・日高町）ウタリ協会により「無縁供養塔」が建立された。その後も遺骨発掘が進み、1993年に納骨堂が建てられた。

しかし、この福満では、他の地区とは異なる展開がある。門別町が委託した業者がブルドーザーでアイヌ遺骨を掘り起こしていた現場に居合わせた人々がいた。福満に先祖の墓があるアシリレラ氏らである。アシリレラ氏は平取町を中心にここ福満でアイヌの慰霊祭を行い、アイヌの人々の遺骨を発掘することとその場所の墓標を引き抜くことを断固拒否したのである。遺骨は一体5万円で町に引き渡されることになっており、業者はこのとき、「金儲けの邪魔をするな」「お前も埋めてやる」などの暴言を浴びせたという。しかし、アシリレラ氏は抵抗を続けた。このことにより、遠い親戚にあたる祖先の遺骨と墓標は現在もそのままの場所にある。この墓標は平取町でも数少ないアイヌ墓標がそのまま残っている場所である。いまひとつは長知内の共同墓地にある。

アシリレラ氏ら有志はそのとき、ブルドーザーが掘り返した遺骨の破片を集め、引き抜かれなかった墓標のそばに木を植え、その根元に遺骨の破片を埋めた。その後もブルドーザーでの遺骨の掘り起こしは一年間ほど続いたというが、遺骨の破片を集め、2002年に「山川力氏の碑」を建立し、その碑の下に遺骨の破片を埋葬した。山川力氏は『アイヌ民族文化史試論』などの著作で知られる研究者であるが、晩年はアシリレラ氏と共に活動を行っていた。この碑の表には

「アイヌの言魂を語り伝えたシサム 山川力

氏碑 せめて魂をエゾ地で眠らせたや」と刻まれている。山川氏の遺骨はこの碑の下にはないが、数多くのアイヌの人々の遺骨の破片が集められ埋葬されている。アシリレラ氏ら有志は、この碑の周辺にアイヌ墓標を立て、かろうじて残された先祖のアイヌ墓標の下に眠る遺骨と共に毎年慰霊祭を行っている。



図1 かろうじて残された福満墓地のアイヌ墓標  
左が男性の碑 右が女性の碑

## 2. 穂別、平取における 朝鮮人労働動員と無縁の碑

### 2-1) むかわ町穂別栄地区（仁和地区）

北海道鉱業鉄道株式会社が1918年沼ノ端－金山間を鉄道区間として敷設することを決定した。社名は「北海道鉄道株式会社」となり、1920年5月から沼ノ端－辺富内（富内）間約73kmの敷設工事に着工した。第一次世界大戦中の好景気を背景に、北海道鉄道金山線が国営鉄道として敷設されることが計画されたが、他の路線敷設に予算が充てられ、国営鉄道とはならなかった（穂別町史編纂委員会編『新穂別町史』穂別町、1610頁）。

この金山線は、1922年7月24日に沼ノ端－生甕（旭岡）間、同年11月11日に生甕－辺富内間、1923年6月12日に生甕－似湾間が開通した。この金山線敷設工事は、タコ労働による過酷なものであったことが数多くの証言や遺体発掘などにより穂別の町史にも記述されている。

「1979年（昭和54）、仁和墓地整備の工事施行中に、鉄道工事の土工夫（タコ人夫）死体二十数体が着物を着用、地下足袋をはいたまま発見さ



れ、無縁仏として埋葬された」(『新穂別町史』1613頁)

「親方の下にタコ10人に一人の割で棒頭というのがいたが、ガケの高い所に立ってタコを監視する。タコはフンドシー本でトロッコを押しているが、もさもさしていると、降りてきて棒でなぐるんです。似瀧に平野という医者がいまして、ここへケガしたのを置いて行く。で、少しでも遅いと、やすんでいると思って迎えに来て、逆さにして引っ張って連れ帰る。「アー・アー」と泣き叫ぶのですよ。近くに駐在所があって巡査もいたが、どうすることも出来ないんです。つらくて川を渡って逃げる人もいたが、つかまると大変だ。火あぶりにかけ、死ぬまでたたくんです。栄駅の丸山の信号の側に鉄橋があって、この下にまだ息をしている人を埋めた。大した埋めたんですよ。昔、雨の降る日には火の玉がよく出たもんです。実際私も何度も見ている」(『古老は語る－西尾清則』1986年穂別町、前掲『新穂別町史』1614頁)

「アー・アー」と泣く」という表現は、日本人の泣き声の表現としては奇異であり、北海道の他の多くの証言では朝鮮人労務者の「アイゴー・アイゴー」という表記が見られる。穂別町史にみられる労務者が朝鮮人であることの可能性も否定はできない。証言中の「丸山」というのは固有の地名ではなく、丸い小高い山という意味の通称であり、また、鉄橋や信号はすでに撤去されている。現在、川岸には浄水場が建てられ柵に囲われ、瀕死の労務者が多く埋められたという場所は、川に隔てられて通行することができなくなっている。現在も場所を特定できる証言が町史に記述されているという点において、むかわ町がこの事実をどのように取り扱うのかは、今後の課題であろう。

穂別町では、1985年頃から町の古老から話を聞いて、「古老は語る」というシリーズを町の広報に連載する企画があった。西尾氏の証言は『広報ほべつ』に載ることはなかったが、町史にそのまま掲載されることになった。筆者は、むかわ町教育委員会の協力を得て穂別町図書館に保管されている西尾氏の証言テープを聞くことができた。テープでは橋の名前が「たつみ橋」となっていた。現在も25年前に録音されたままの証言テープが数十本あるということで、むかわ

町では1985年当時の証言テープの原稿を起こす作業を再開しているという。鉄道敷設に限らず、町の近代史において新たな証言が発掘される可能性も全くは否定できないと考える。

## 2-2) 安住地区

1922年には辺富内(現・富内)まで開通していた金山線だが、辺富内線は十勝から日高を経て辺富内にいたる114キロの鉄道として敷設が決定された。道南、道東を結ぶ鉄道として、沙流川、鵠川の上流地域のクロム、石炭などの資源の開発と運搬が目的とされ、富内から振内に至る線の敷設が急がれた。振内には日本国内の総生産量の6割を供給するほどのクロムを産出した八田鉱山があり、その先の岩知志・仁世宇には日東鉱山、新日東鉱山などがあつた。クロム運搬のための鉄道敷設は急務であり、辺富内線敷設の当初の目的でもあつた。

辺富内－振内間の隧道工事は1941年1月に着工し、膨張性土質であつたことや湧水などの障害があり、1944年～1945年1月に四箇所の坑口の工事を中止し、終戦後の1946年1月から工事を再開したが、1948年9月にGHQの指令により中止となつた。これから3年後、1953年2月新規着工路線として採択され、1956年8月に工事を再開し、1958年11月に完成となつた。実に8年間の中止時期を含み着工から完成まで18年が費やされたのである。平取町の振内、岩知志で産出されるクロムの運搬を目的として、辺富内－幌毛志間の辺富内線(後に富内線)工事が着工された。特に振内の八田鉱山では日本のクロム生産量の6割を産出しており、辺富内線の敷設は急務だつた。

工事の請負は、1942年から1943年まで鉄道工業株式会社と川口組の施工を経た後、1944年からは軍の早期開通の要請と極めて危険性の高い区間であつたことか直轄施工となつた(日本国有鉄道札幌工務局『辺富内線 日振ずい道工事誌』1959年12月、12頁)。1940年4月から1942年3月、1941年1月から1943年1月までは地崎組が鉄道省札幌工務局事務所からの発注で辺富内線工事を請け負つたことになっている(地崎工業社史編さん委員会編『地崎工業百年史』1992年、94頁、朝鮮人強制連行実態調査報告書編集委員会・札幌学院大学北海道委託調査報告書編集室『北海道と朝鮮人労働者－朝鮮

人強制連行実態調査報告書』1999年、338頁）が、『辺富内線 日振ずい道工事誌』では、鉄道工業株式会社と川口組の請負としている。工事現場付近のポロケシオマプで死亡した朝鮮人の埋火葬認許書が「川口組内」となっていたことから、元請が地崎組でその下請けが川口組であったということがわかる。

随道の掘削には二本鍬、ツルハシを用いて12時間作業を行い、平均1m<sup>2</sup>の進行をしたが、こうして掘った随道も数日すると天井矢板が折損し、坑道柱は曲げ折られるという状況が続いたり、横坑坑口付近でメタンガスが発生し、カンテラの火から引火し、切羽一面が火の海となったこともある（前掲『辺富内線 日振ずい道工事誌』23頁）など、随道工事は困難を極め、また非常に危険を伴うものだったことが工事誌にも記述されている。しかし、犠牲者については1943年3月12日、5970m<sup>2</sup>～5978m<sup>2</sup>の工事において、アーチの下方からブロックの目地が切れて落下し、作業中の一名が下敷きとなって死亡したのが「日振随道初の犠牲者」であるとしている（前掲『辺富内線 日振ずい道工事誌』29頁）。犠牲者について触れられているのは、この一ヶ所のみで、当時の多くの証言とは大きな齟齬がある。工事当時もこの工事誌が発行された1959年当時も国家や工事施工主にとって「犠牲者」として認知されたのは誰で、認知されなかったのはどのような人々だったのか。

筆者が2006年～2008年にかけて振内の郷土史執筆にあたり、調査をする中で、町道131号線とポロケシオマプ川に沿った幌毛志一帯がかつて朝鮮人宿舎やタコ部屋が立てられた場所であり、そこから抜け出した朝鮮人やタコ労働者を匿い脱出を助けた人々の証言を得た（石純姫『鉄道』『郷土史ふれない』ぎょうせい、2010年、151～157頁）。

その後も調査を進めるなかで、アイヌの方からの証言を得ることができた。幼い頃住んでいたところが辺富内線の敷設現場に近く、労働者たちの様子を克明に記憶していたこと、現場から脱出してきた朝鮮人を匿って逃がしていたこと、また多くの労働者が繋がれて工事現場まで連行されていく様子に加え、遺体を焼却する煙が毎日のように墓地から上がっていたこと、戦争末期には焼却も出来ず労働者たちの遺体が道

端にもそのまま放置されていた様子など、当時の労働現場がいかに過酷であったかについての貴重な証言となっている。この証言については、本稿の最後に資料として記載する。

### 3. 穂別の墓地における慰霊碑

穂別の共同墓地は1913年三ヶ所、1925年には安住ほか二ヶ所が開設された。以後、1929年までに三ヶ所が設置され、穂別の共同墓地は八ヶ所となった。これらの共同墓地は住民の要望により村役場が村議会の決議を経て道庁に許可申請を行い、許可が下りた後、穂別村長から北海道庁長官に北海道国有未開地処分法第四条による無償下附を申請し、墓地の開設となった。この墓地のいずれも火葬場が設置されており、火葬作業は火炉もしくは露天で行われていた。穂別町全域の火葬場が設置されるのは1965年からである（穂別町史編纂委員会編『新穂別町史』穂別町、1991年、1469～1971頁）。

穂別では1969年、墓地の整備を行い穂別霊園の造成を決定した。同年6月29日「穂別町霊園使用条例」を規定し、1971年からは移転が行われた。これに伴い和泉地区の旧墓地を廃止し、新和泉墓地を開設することも決定された。新墓地の購入にあたっては申し込みと抽選が行われ、「霊園を一層美しいものとするため、抽選日当日苫小牧市から墓石店を呼んで見本を陳列させ、格安の値段であっせんするので、これを機会にできるだけ墓石に改めるよう呼びかけた」（『広報ほべつ』第132号、1971年7月号、『新穂別町史』1474～1475頁）とある。

和泉地区はアイヌの人々が強制移住させられた場所であり、旧墓地はアイヌの人々の墓地であった。「できるだけ墓石に改めるよう」という呼びかけは、単に「霊園を一層美しいものとするため」という審美的な理由だとすれば、それはアイヌの人々にとって耐え難いほど軽い理由としかいえないだろう。あるいは、生活習慣においてほとんど同化されていたアイヌの人々にとって、自らの文化のありようを残す葬儀と埋葬の最後の風習までが、消滅させられていくという深刻な局面だったはずである。和人にとってみれば墓地の「近代化」という生活様式の変化が、アイヌ民族の文化にとって、この上なく重

要な核心的な部分への侵食であることを改めて考えさせられる。

更にこうした旧墓地からの移転は各墓地で無縁墓が問題となった。アイヌの人々の遺骨とともに、穂別の各地域では金山線、富内線、幌毛志の隧道工事などに伴う多くの朝鮮人労務者やタコ労務者の遺骨や遺体が新たに発掘されることになったのである。

穂別霊園では1974年10月26日に旧墓地移転に伴い、92柱の無縁仏を安置する無縁碑を建立し、入魂式が行われた(前掲『新穂別町史』1474頁)。この穂別霊園は現在仁和地区の永林寺の上方にあり、かつての栄駅から川を隔てた高台の場所にある。

また、1982年、安住にある富内霊園の整備に際し、旧墓地には当初予定した以上の無縁仏があることが判明したため、同年度の1,814万円の補助事業では対応しきれなくなり、翌年度にも126万円を投入して無縁碑を建立した(同1474頁)。このことは、S氏の証言のなかにもあった数多くの遺体がそのまま放置されていたことと対応する。

#### 4. まとめ

「死」や「魂」という物語ほど、グローバル化がいかに進行しようと、ナショナルな枠のなかで語られ表象される。国家や国民というものが身体化されず、常に居心地の悪さを保ち続けてきた在日朝鮮人やアイヌ民族、そして朝鮮人とアイヌ民族の両方のルーツをもつ人々が、常に揺らぎと葛藤の狭間で彷徨い続ける営みは、生きていときだけではなく、死後もなお、その魂を慰める言葉さえ奪われたままなのである。

平取町ではアイヌ民族については町史における膨大な記述とわずかながら公的なモニュメントが作られてもいるが、平取町、穂別町のいずれも朝鮮人の犠牲や存在については公的な記録には全く記述も表象もされていない。

筆者が平取町振内地区の郷土史を執筆するにあたり、ポロケシオマブ(幌毛志地区)で死亡した朝鮮人の埋火葬認許書に基づき振内の共同墓地に埋葬されている朝鮮人の遺骨について記述をした際、郷土史の編集委員会はそのような記述をされることは「迷惑だ」と明言した。筆者が

論文や著書で記述することは一向にかまわないが、郷土史に記載することだけは絶対に出来ないということだった。その後は恫喝にも似た脅迫が行われた。いまだにこのような史実を公的記録に記載することさえ、平取町においては困難であることを痛切に認識した。

ところが、2010年3月、平取町は振内の共同墓地に「無縁故者之碑」を建立した。郷土史に載せることは出来ないが、慰霊碑だけは建てたということである。しかし、そこに埋葬されているのは「無縁故者」ではない。埋火葬認許書に明記されているように、本籍もわかっている朝鮮人なのである。

「死」は、いつも強固なナショナリズムの枠のなかでしか語られない。「国民の死」だけが胸に刻まれるべきものなのだというよりも、「朝鮮人の死」は、注意深く記憶と記録から排除されるべきものとなっている。そして、死後の魂の物語についても、深い忘却の中におかれているのである。死後の物語を信じて疑わない人々の間でさえも。

2011年11月19～20日、苫小牧駒澤大学の学生6名と教員2名で平取町の記憶の継承とその表象を辿るフィールドワークを行った。学生は日本人4名と韓国、台湾からの留学生各1名である。本稿で概略した各地区を巡り、アイヌ民族の伝統的家屋チセで宿泊をした。このチセはアシリレラ氏の敷地内にあるものである。学生たちが沙流川の川原で石を拾い、埋火葬認許書に記されている名前を石に書いた。翌日は振内の共同墓地にある「無縁故者之碑」の前に名前の書かれた石を置き、慰霊の祈りを捧げた。

「石に名前を書いた」ことについて少し説明をしておきたい。三重県熊野市において「紀州鉾山の真実を明らかにする会」は、木本町での朝鮮人虐殺事件と紀州鉾山での朝鮮人強制連行の実態を長年にわたって調査し、その犠牲者たちの「追悼の場」を多くの困難な状況のなかでつくり上げてきた。2010年3月28日追悼碑の除幕式が行われた際、犠牲者の名前が書かれた石を紐で結び、名前を呼び上げながら紐をほどくという慰霊が行われた(紀州鉾山の真実を明らかにする会編『紀州鉾山でなくなった朝鮮人を追悼する碑序幕集会報告と記録』2011年7月10日)。「石に名前を書いた」のは、この追悼式に



做ったものである。

平取町や穂別町の様々な慰霊の空間は、多様な人々の錯綜した歴史認識が象徴的に示された場所であり、記憶の捏造と意図的な忘却、その忘却に抗う力が闘ぎ合う場所でもある。記憶をめぐる闘争は世界の各地で無数に繰り広げられているが、アイヌ民族と朝鮮人をめぐる複雑な歴史を含め、グローバル化された世界にあって、日本というナショナルな枠組みで語られる記憶の呪縛の強さを痛感する。平取や穂別というローカルな場所の記憶の闘争は、どのような歴史を次の世代へと継承するのか、ひとつの小さな試金石となるだろう。

拙稿をまとめるにあたり、多くの方のご協力を得ました。アイヌ民族と朝鮮人の尊厳と未来にむけて常に精力的に活動し、温かいご協力をいただいている山道アシリレラさん、貴重な証言をしていただいたSさん、穂別町の資料について便宜を図っていただいた北海道むかわ教育委員会教育振興課主任藤田浩樹さんにこの場をお借りして心から感謝申し上げます。



図2 振内共同墓地内 「無縁故者之墓」

#### <資料 証言記録>

Sさん(1937年生まれ)

子どもの頃住んでいた家は、高台にあり、富内線の建設現場から近いところにあった。そこには、多くの朝鮮人労働者や日本人のタコ労働者たちが酷い労働現場で働いていた。

子どもの頃、ある日、畑で知らないおじさんが、一生懸命草をむしっていた。突然草の茂みのなかから現れ、ものすごくびっくりした。今でもその人の顔はよく覚えている。髭を伸ばし

た丸顔のおじさんだった。

大急ぎで祖母に言いに行くと、「そんなに驚くことはない。同じ人間なんだから」と言って、その人のところまで行った。そのおじさんは、祖母を見て手を合わせているのを見て、祖母も同じように手を合わせ、「ごはん」というと、その人も「ごはん」というので、祖母は、「この人は大丈夫だ」といって、ごはんと味噌汁を竹のかごに入れて、そのおじさんに差し出した。

また、畑の片隅にトウモロコシを焼いた焚き火の跡をみかけることがよくあった。富内線の工事現場から逃げてきた人たちが、そこで食べたのだろうと思っていた。

10歳年上の兄は、13歳くらいの頃、朝早く起きると、近くを歩き回ったりしていたが、そんなとき、畑の端っこで、葡萄を食べている人を見かけたという。それが逃げてきた朝鮮人だったのではないかともしいう。兄は16、7歳くらいの頃、工事現場の見張り役をしていた。まだ若かったが、労働者たちからは「監督、監督」と呼ばれていた。労働者たちが自分たちに与えられた少ない配給のタバコを兄に差し出そうとするのを、いつも断っていたという。

物置や馬小屋には、「絶対に近づいてはいけない」といつも言われた。今、考えると、そこには、逃げてきた朝鮮人たちを匿っていたのではないかと、四つ年上の姉は言う。兄は工事現場の見張り役であったにもかかわらず、そこでのあまりにも苛酷な状況にある朝鮮人たちを逃がしたり、見てみぬふりをしたり、匿ったりしていたのだろう。

戦後、兄に助けられた人が、お礼に安住の家を訪ねてくることがよくあった。中には中国人もいた。

小学校に入った頃、昭和19年ごろだったと思うが、教室の窓から、綱でつながれた人たちが2列になって歩かされているのを見た。先生は見ると、腰のところに縄でしばられ、等間隔につながれて歩かされている人たちは、幌毛志の方の鉄道建設のために連れていかれたのだと思う。とてもたくさんの人がいた。子ども心に、10時の富内線に乗って来たのだな、と思った。

高台にある家からは、沢をひとつ隔てたところにある共同墓地から立ち上る煙が毎日見え

た。ああ、また人が死んだのだな、と思っていた。当時は火葬場などはなく、墓地の空き地に鉄板を敷いてそこに遺体を置き、火葬にしていた。最初の頃は、そうやって火葬にしていたが、最後の方になると、火葬にする暇もなく、そのまま土葬にしていたり、道端に遺体が転がっていた。あるいはそのまま鉄道に生き埋めになっていった。大人たちは、見てはいけない、と言って、その遺体の上を木の枝などで覆って隠していたが、戦後、そのままではいけないということで共同墓地に無縁の碑を建てることにした。

(2011年8月18日

　　苦小牧駒澤大学石研究室にて聞き取り)